

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

つ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

## かわいい子だからこそ選ばせる旅

私が若い頃の話です。

今ではあまり見られませんが、当時は「家庭訪問」があった学校も多く、その時の私の勤務校でも実施していました。

働き方改革が叫ばれる現代ではあり得ない教育活動ですが、実施すること自体には全く無意味だとは思っていません。

当時、子ども部屋を案内してくれたりする親御さんなどもいて、生徒の家庭での様子がよくわかりました。ご家族の方との距離が縮まったりして、その後のコミュニケーションが円滑になるなどの効果もありました。何よりも、どこの家庭でも、お茶やケーキやお茶菓子を出してくれるので、それもささやかな楽しみでした。

ある生徒の家を訪問した時のことです。お母さんと話をしている最中、突然、襖を開けて、おばあちゃんが現れ、話に割って入ってきました。

「先生、一つお願いがあるんですが。」

「何でしょう？」

「隣の家の子は自転車通学が認められているのに、うちの子は自転車通学はダメだと言われて歩いて学校に行ってるんですが、不公平じゃありませんか？」

「自転車小屋のスペースにも限界があるので、自転車通学許可の範囲を制限せざるを得ないのです。ここと隣の家がちょうど境界線なんです。」

「だったら、境界線を見直して、一軒分近くに線引きを変更してもらえませんか。」

「お気持ちはわかりますが、その理屈と道理で同じようをお願いされたら、その隣の家、またその次の隣の家もと、どんどん認めないといけなくなります。今の境界線を変更することはありません。どこかで線引きをすることが必要なんです。」

「私はとにかく、孫が不憫で不憫で。」

なかなかおばあちゃんが納得してくれないので、その場に生徒本人を呼びました。

「君は、バスケットボールで県大会優勝をめざしているんだっただよ  
ね。学校に歩いて登校しているけど、自転車で通いたいと思っ  
ているの？」

「いえ、全く思っていない。」

「だよ。」

話は決着しました。彼は必ずそう答えると確信していました。もし自転車で通いたいなんて言うものなら、県大会優勝なんてチャン  
チャラおかしい、と言ってやろうと思っていました。彼もそんな私の  
顔色をうかがったのかもしれませんが。

さて、来年度から、バス通学以外の生徒で現在自転車通学範囲の  
生徒は必ずしも自転車通学である必要はないこと、つまり「徒歩通  
学」を推奨します。その理由は、以下の通りです。

- ◇現在の自転車通学の状況（利用生徒数、交通マナー・ルールの悪さについて地域から苦情が相次ぐ）から判断して、今後大きな加害・被害事故等の危険性について大いに懸念される。
- ◇学校の登下校は、学校が指定された経路を利用しているならば「学校の管理下」であるが、地域から協力をいただいたとしても、十分な見守り体制がとれない。
- ◇自転車利用者のヘルメット着用義務が法令化するなど、自転車利用による安全確保が現代の喫緊の課題であるという社会の趨勢である。
- ◇現在自転車通学許可範囲でも、特に自転車を利用しなくても十分に徒歩通学圏内であるところも多く、実際冬季間は徒歩通学をしている。（市内の他の中学校で、二中の通学範囲以上に遠いところから徒歩通学している生徒もいる。学区内の小学生でも遠い距離を歩いてくる子もいる。）

といくつかの理由を挙げましたが、最大の目的は、「命」を守ることです。もちろん自転車のみが交通事故の対象ではなく、徒歩通学でも安全確保は重要です。しかし、自転車は自分が被害者になることも加害者になることも大いにあり得ます。幸い、だれかの「命」が失われなかったとしても、大きな傷害事故になる確率も、現状からすると徒歩以上に大きいのです。この1年間大きな事故がなかったのはたまたまです。学校は、大いなる危機感を抱いています。

あくまで徒歩通学を「推奨」するということです。もちろん、自他の安全を守れるという強い意志と規範意識をもつ生徒や、特別な事情を抱えている生徒には、あらたに改訂した「自転車通学許可願」

を提出の上、自転車通学を許可したいと考えています。

おばあちゃんは「孫が不憫で不憫で」と言います。「不憫」とは、かわいそうとか気の毒、という意味です。十分に徒歩で通学できるのに自転車通学できない生徒を、私はかわいそうとも気の毒とも全く思いません。しかし、生徒が交通事故で命を落したり大ケガを負ったとしたら、その子もその身内の皆さんのことも、心からかわいそうで気の毒だと思えます。

そしてこの「命」を守るということ以外にも、必要以上に子どもを甘やかすべきではないということです。新潟市のある中学校では、風雨が強い日には学校前の道路にたくさんの車が縦列で並ぶそうです。同居、あるいは近くに住むおじいちゃんやおばあちゃんが、孫かわいさに、孫による学校の公衆電話からの電話一本で学校にお迎えにくるのです。かつては市内でも有数の部活動強豪校と言われていた学校ですが、今はそれほどでもないような現状を見るにつけ、この光景と全くの無関係ではないものと、個人的には思っています。

私は子どもたちにはこう言いたいのです。

境界線の内にいようが外にいようが、隣の景色をうらやむことをするよりもまず、今できる最善なことは何なのか考えよう、と。目指すべき頂に向かう途中で分かれ道があったとしたら、あえて険しい方の道を進もう、と。

「かわいい子には旅をさせろ」ということわざがあります。言うまでもなく、「旅」とは本当の「旅行」ではなく、厳しい経験を積むほど子どもは成長するのだから、かわいい子ほど敢えて辛い思いをさせすべきだという意味です。子どもの成長にとって、自身にとってプラスになる試練や小さなリスクの積み重ねは必要です。

子どもの命はもちろん、このことわざすらもこの世から姿を消す、つまりこのことわざが「死語」になるような、そんな甘々な世の中にはなってほしくないのです。